

午後の部シンポジウム『言語学習と協同』開催報告  
コーディネーター 浦部季弥  
上智大学大学院言語学専攻博士後期課程

## Abstract

A symposium on language learning and cooperation was held in the afternoon session of Sophia Linguistic Society 28<sup>th</sup> annual forum. We had 2 leading practitioners and researchers of cooperative learning in Japan as guest speakers: Professor ERIKAWA Haruo from Wakayama University and Professor Fushino Kumiko from Rikkyo University. Professor Fushino also led a workshop on the same topic. Professor Erikawa spoke about how cooperative learning is necessary in today's English education in Japan, and introduced successful examples as well as tasks that are likely to induce students' cooperative learning. Professor Fushino introduced her research projects on willingness to communicate in second language (L2) group work. In the workshop titled 'Let's try cooperative learning,' the audience formed groups and experienced three tasks of cooperative learning.

### 1. はじめに

言語学習におけるペアワークやグループワークは教壇に立つ教師にとっては身近な授業技術である。協同学習はいくつかの条件を満たすグループワークにより学習者同士の学び合いを高める考え方で、江利川(2012)によれば「少人数集団で自分と仲間の学びを最大限に高め合い、全員の学力と人間関係力を育てる原理と方法」(p. 6)と定義される。1970年代からアメリカで実践・研究が盛んになり、現在では教科を問わず様々な方法が確立されて世界中で進められている(Slavin, 1995)。近年では英語教育雑誌で特集が組まれたりや複数の本が出版されていることから、日本の英語教育においても関心の高まりがうかがえる。

本年度の上智大学言語学会年次大会午後の部特別企画では、協同を取り入れた英語学習において第一線の実践者、研究者である江利川春雄氏と伏野久美子氏を講師に迎え、協同の原理や実践方法、実践例、課題等についてお話しいただいた。さらに、講演の後に日本協同教育学会認定の上級協同学習トレーナーでもある伏野氏を再び講師に迎えてワークショップを行った。協同による言語教育研究において日本で最先端の研究者による実践・研究成果から、協同学習への関心が高まっている背景を含めて現代の言語

教育の実践・研究における重要な示唆を得ることができた。以下に、当日の様子を報告する。

## 2. 江利川春雄氏による講演「協同学習を取り入れた英語授業改善」

初めに、協同学習による英語授業の改善のために全国の学校を訪問している江利川春雄氏の講演が行われた。江利川氏は、現代の日本の英語教育が抱える諸問題とその背景を紹介し、それらへの解決策として協同学習を取り入れる有効性を、協同学習の7つの原理と豊富な実践例を交えてお話くださった。以下に江利川氏の講演をまとめる。

現代の英語学習者、特に公教育の生徒たちの学習環境は、対人コミュニケーション能力の低下やIT技術の浸透による情報のリアルタイム化、双方向化という時代の影響を大きく受けている。また、英語力の低下、英語嫌いの増加を示す調査結果も出ている。このような状況においては、教師が板書し講義するという一方的な授業スタイルよりも、上述のような時代を生きる生活・学習環境に即した、協同的で双方向的なコミュニケーション能力の育成が必要である。また、「見るだけ」や「聞くだけ」よりも、「話し合った時」「体験した時」、「教えた時」により学んだ内容が記憶に残るというアメリカの国立訓練研究所による研究結果は、協同学習での学習効果が高い可能性を示唆している。

協同学習の7つの原理は、それぞれ授業に取り入れやすいタスク例と共に紹介された。また、実際に協同学習を学校レベルで取り入れて大きな成果を上げた複数の学校での生徒の学びの様子や、その成果を示す量的なデータも紹介された。印象的だったのは、試験の点に表れた学力の向上だけでなく、学校生活の質的な変化だ。「学びが楽しい」という生徒の言葉や、それまで学校生活に大きな不満を抱えて、孤独を感じたり、いじめを受けていた可能性がある生徒が、協同学習を経験したことで他の生徒から承認されていると感じ、学校生活に満足するようになったというアンケート結果も紹介された。江利川（2012）では、教師がこれらの原理を自ら置かれた環境に照らして理解し、それぞれの形で、少しずつ実践して良い結果を生んだ様子も報告されている。

江利川氏の講演で伝えられたことは、「協同学習で英語力が上がる」という単純な因果関係ではなく、協同学習によって建設的で円滑な人間関係を築き、その学習環境において生徒がより学びやすくなる、ということだと私は理解している。15歳の3割が孤独だと感じている現代において（UNICEF, 2007）、学校生活を量的、質的な両面で向上させるために、協同学習は大きなヒントを含んでいると考える。

### 3. 伏野久美子氏による講演「英語学習者の心理と協同学習」

この講演では、伏野久美子氏が日々の教育活動をもとに研究されている英語学習者の心理について、特に第二言語でのグループワークにおけるやる気と準備度に焦点を当ててお話いただいた。教師にとって生徒のやる気は常に気に掛かる問題である。特にグループワークにおけるそれを扱った研究は少ないため、興味深い講演内容だった。

伏野氏は、MacIntyre, Dörnyei, Clément, & Noels(1989)が紹介した第二言語における *Willingness to communicate* を第二言語でのグループワークに応用して研究を進められている。*Willingness to communicate* は、以下のように定義されている。“A readiness to enter into discourse at a particular time with a specific person or persons, using a L2.” (MacIntyre et al., 1998, p.547)

伏野氏はこれを第二言語でのグループワークに応用した上で、*Willingness to communicate in L2 group work*、つまり第二言語でのグループワークにおいてコミュニケーションする「やる気」とした。それに影響を与える要因として、第二言語におけるグループワークへの準備度(コミュニケーションへの自信度とグループワークに関する信条によって表される)を仮定し、調査を行った結果を発表された。

Fushino(2008;2010)では、協同学習ではないグループワークを行った大学1年生約700名を対象としたグループワークへの準備度に関する調査を行った。学期の最初と最後にグループワークへの信条とコミュニケーションの自信度に関するアンケートを行ったところ、学期の最後にはすべてのクラスでコミュニケーションの自信度が上昇した。グループワークへの信条に変化はなかったが、コミュニケーションへの自信度の上昇によりグループワークへの準備度は上昇した。

次に、Fushino(2011)では、協同学習によるグループワークを行った1クラスの学生を対象に、通年で3度のアンケート調査を行った。その結果、前期の始めから前期の最後までにグループワークへの信条、コミュニケーションの自信度ともに有意に上昇し、この効果は後期中も維持された。Fushino(2008;2010)とFushino(2011)の結果を比較してみると、グループワークへの信条の変化に有意な差が見られる。コミュニケーションへの自信も後者の実験での方が上昇の度合いが大きかったが、前者においても有意に上昇しているため、この2つの実験間での有意差はなかった。

これらの実験により、協同学習を用いることは、第二言語でのグループワークにおける準備度、特にグループワークへの信条によい影響を及ぼすことがわかった。協同学習とグループワークへの準備度、それらとやる気の

関係は、協同学習を始めよう、進めようという教師にとってはとても有用な情報であろう。伏野氏の今後の研究の成果が待たれる。

#### 4. 伏野久美子氏によるワークショップ「使ってみよう、協同学習」

講演に続き、日本協同教育学会の協同学習上級トレーナーでもある伏野氏にはワークショップを担当していただいた。このワークショップでは協同学習における基本事項の紹介の後、来場者が授業ですぐに使える技法を体験した。

基本事項では、協同とグループワークは同義ではなく、協同学習の原理に基づく条件を満たすグループワークを協同学習と呼ぶということと、その条件として日本協同教育学会が定める協同学習の定義と9つの原理が紹介された。

その後、来場者は協同学習の原理にのっとった3種類のグループ活動を体験した。「私の好きなもの」では、自分の好きなものをメンバーに紹介し、聴いたメンバーはそれを次々と記憶する。正確に活動を進めるにはメンバー間でしっかりと顔を見て確認しながらコミュニケーションをとらなければならない。次に行った「共通点を見つけよう」では、他のメンバーとの共通点を見つけることを目的に、まずは個人で自分に関すること3つをそれぞれ1文にまとめ、それを尋ねる疑問文も書き留めた。書いたものグループ内で発表し、全員に共通する点が見つかるまで尋ね合うという活動だった。3点ずつメンバー全員が尋ね合うと、情報量はとて多くなる。尋ねている本人だけでなく、全員がやりとりに耳を傾け、記憶しないと共通点を見つけることは難しいようだった。最後に行ったのは「ダウト！」という活動だ。参加者は自分に関することを3つ文にするが、そのうち1つは嘘でなければならない。発表者はグループ内でそれら3つを発表し、他のメンバーは嘘を見破るために発表者に質問をする。それを元に、他のメンバーは相談して3つのうちどれが嘘だったかを決め、発表者に問うという活動だ。

すべての活動において、それぞれがしっかりと考えて責任を果たし、他のメンバーの話をじっくり聴き、目標達成のために支え、補い合う必要がある。これらは協同学習の原理に含まれるものだ。活動の終了後には、やはり原理の一つであるグループで振り返りの時間が設けられ、それぞれ講演とワークショップを通じた学びについて話し合った。最後に伏野氏は、始めから授業のすべてで協同学習をしようとせず、まずは少しだけ試して、焦らずに続けてみるのが大切だと説明した。

ワークショップを見ていて、来場者のグループが徐々に打ち解けていく様

子がうかがえた。それぞれの活動における目標を達成するためには、メンバー同士で誤りを笑ったり、話を聞かずに他のことをしている暇はないようだった。最後の振り返りの時にはグループのメンバーがすっかり打ち解け、与えられた課題以外でお互いの教授環境について問題点を話し合ったり様々に提案し合ったりしていた。

このワークショップにおいては3つの活動はすべて英語で行われたが、外国語の授業においては適宜母語の使用を認めることも重要だと考える。その点においても、3つの活動は「初級者でも外国語で行うことができる部分」と「活発なコミュニケーションのために、上級者でなければ母語で行ってもよい部分」が分けやすく、授業に取り入れやすいと感じた。

## 5. 総括

本シンポジウムでは、協同学習を行っている人や、興味はあれ実践に至らない人が、協同学習について知識を得て（または深めて）、実践例やタスク例に触れ、体験することを目的としていた。江利川氏の講演により、実践面での協同学習の位置づけ（現代日本の英語教育の問題にどう応えるのか）とその根付き始めた様子が示され、伏野氏の講演においては、すでに協同学習に目が向いている教師が知っておきたいグループワークでの学習者のやる気について語られた。それらを踏まえ、ワークショップでは協同学習の簡単な技法を体験して学ぶことができた。短くはあったが、とても内容の充実した時間になったと思う。

最後に短い質疑応答の時間が設けられ、そこでは主に協同学習の難しさが話題となった。内容を、会場の様子や私見を含め以下にまとめる。

もともと会話が苦手一人でコツコツと努力するタイプの学習者もおり、彼らには協同学習は向かないという考え方もある。当日会場では、少数だがグループ活動に参加しない来場者も見られ、実際の教室でも学習者が参加しないという問題は十分起こるように思われた。教室での第二言語での発話は自信の有無が大きく関わるため、やりたがらない学習者も多いかもしれない。仲間との対話を通した学びのすばらしさの反面、これらを問題と感じる教師が多いことも当然であろう。この問題に対し、江利川氏は「大切なのは協同学習を実践すること自体ではなく、学習者の学びを最大化することであり、そのためにその学習者またはクラスに合う指導法を使うことだ」と答えた。

教室には様々なタイプの学習者がいて当然である。江利川氏、伏野氏の講演、ワークショップでも紹介されたが、協同学習では1つのグループをそれぞれに異質なメンバーで構成することが原理の一つとして挙げられる。

協同学習を実践するにあたっては、一人黙々と学ぶタイプの学習者であっても、価値として協同を学ぶ意義を重んじれば、協同でのグループ学習に引き入れることも大切と考える。しかし同時に、教室において学ぶ方法は協同だけではないと Johnson & Johnson (1987)も指摘しており、一斉授業を併用する等、様々な学習スタイルに対応することも重要だと思われた。Oxford (1997)も外国語学習における協同学習について、似た点を指摘している。協同学習ではそれまでとは違う指導法や創造力が教師に求められ、複雑なクラス内のグループ力学、学習スタイルの相違への対応や会話が苦手な学習者をともすると無理に引き込むことも求められる。Oxford(1997)はこれらがすべての文化において受け入れられるのかという疑問を提示しており、さらなる実践と研究が求められる。

最後に、短く感想を述べる。開始前にはお互い見ず知らずであった来場者同士が、本シンポジウムを通して様々に情報を共有し、肩を並べ、会話を弾ませながら会場を後にする様子がみられた。コーディネーターとして本シンポジウムのねらいの一つにしていた「来場者が自ら抱える問題を仲間と共有し、解決の糸口や解決に向かう力を得る」が達成されたように感じ、うれしく思う。多少の差はあれ、多くの来場者にとって実りとなったことを望むばかりである。

\* このシンポジウムを開催するにあたり、計画の初期の段階から様々にご協力くださった江利川先生、伏野先生、上智大学言語学会幹事の先生方、事務局、学生幹事の皆さま、そしてご来場くださった皆さまに心より感謝いたします。

## 6. 引用文献

江利川春雄 (編著). (2012). 協同学習を取り入れた英語授業のすすめ 大修館書店.

Fushino, K. (2008). *Measuring Japanese university students' readiness for second-language group work and its relation to willingness to communicate*. Temple University, Philadelphia.

Fushino, K. (2010). Causal relationship between communication confidence, beliefs about group work, and willingness to communicate in foreign language group work. *TESOL quarterly*, 44: 700-724.

- Fushino, K. (2011). Changes in students' readiness for foreign language group work over a year. *Experiments in Education*, 39(3), 71-80.
- Johnson, D. W. & Johnson, R. T.(1987). *Learning together and alone: cooperative, competitive and individualistic learning* (2<sup>nd</sup> ed.). Englewood cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Macyntire, P, Dörnyei, Z., Clément, R. and Noels, K. A. (1998). Conceptualizing willingness to communicate in a L2: A situational model of L2 confidence and affiliation. *Modern language journal*, 82: 545-562.
- Oxford, R. (1997). Cooperative, collaborative learning and interaction: Three communicative strands in the language classroom. *Modern language journal*, 81: 443-456.
- Slavin, R. E. (1995). *Cooperative learning* (2<sup>nd</sup> ed.). Needham heights, MA: Allyn and Bacon.
- UNICEF (2007). *Child poverty in perspective: An overview of child well-being in rich countries, Innocenti Report Card 7*. Florence, Italy: The UNICEF Innocenti Research Centre.